

実践哲学ノート (36)

谷口 孝男

Notizen über die praktische Philosophie (36)

Takao TANIGUCHI*

Abstract

Die vorliegende Arbeit forscht nach dem Sinn des Menschen als menschliches Naturwesens. Der Kern des Sinnes des Menschen ist aber nichts anderes als Menschlichkeit (Humanität) . Also behandle ich die praktische Philosophie überhaupt, namentlich die menschliche praktische Philosophie Yoshiaki Utsunomiyas. Dabei zugleich möchte ich sein Denken selbst und auch seine Denkweise lernen.

Danach möchte ich den Sinn des menschlichen Naturwesens auf Grund der Menschlichkeit (Humanität) aufklären und ferner den Menschen an sich selbst als systematische Totalität der drei Lebenstätigkeiten, die aus Konsumieren, Produzieren und Verkehren bestehen, zeigen.

Der Sinn des Menschen enthält die Menschlichkeit (Humanität) als sein übergreifendes Moment in sich. Daher müßten wir vor allem die Menschlichkeit (Humanität) untersuchen.

【補論15】[デカルトの生き方]

1 . ルネ・デカルト (1596 ~ 1650年 , フランス)

生涯独身であったが、「1635年39才のとき、オランダの婦人ヘレナとの間に娘フランシーヌ生まれる」。1640年フランシーヌ死ぬ（猩紅熱）。デカルトは孤独を愛するタイプの人であった。オランダに定住したが、引っ越し魔であった（人との密着的關係を嫌ったとの説がある）。「この国（オランダ）に隠れて住む決心をさせた・・・ここで私は、他人のことに興味をもつよりは自分の仕事に熱心な、きわめて活動的な多数の人々の群れの中で、最も人口の多い町で得られる生活の便宜を何一つ欠くことなく、しかも最も遠い荒野にいると同様な、孤独な隠れた生活を送ることができた」（3 - 7）。

2. 『方法序説』

a. 「理性をよく導き (pour bien conduire sa raison), もろもろの学問において真理を求めるための方法についての序説 (discours)」が正しい表題

b. フランス語で出版された。当時, 学問の共通語はラテン語であった。読者層の問題。

c. 6部よりなる。『世界の名著・22・デカルト』(中央公論社)を用いる。

3. 第1部

§ 1

a. 「良識 (bon sens) はこの世で最も公平に配分されているものである。」 「良識または理性 (raison)」

b. 「よい精神をもつというだけでは十分ではないのであって, たいせつなことは精神をよく (正しく) 用いること」「ゆっくりとしか歩かない人でも, もしいつもまっすぐな途をとるならば, 走る人がまっすぐな途をそれる場合よりも, はるかに先へ進みうるのである」

§ 2

「理性すなわち判断力のほうは, それのみがわれわれを人間たらしめわれわれを動物から分かつところのものである」

§ 3

「哲学者の眼をもって人みなのおそろしいさまざな行動や事業をながめるとき, ほとんどすべてが空しく無益なもののように私には見えるにせよ」。デカルトは「真理の探求」に専念する <認識の人>であった。

§ 4

「自分自身に関する事からについてはわれわれはまことに誤りやすいこと, また友だちの判断がわれわれにつごうのよいものである場合, それはまことに疑うべきであることを, 私は知っている。」自分の能力を過大に, あるいは過小に評価したり, 自分の性格や気質を誤解することはよくある。つまり自分についての幻想を紡ぐのである。友だちや親やその他親しい人が自分に好ましい判断を下すときこそ, その判断を疑い, その判断の是非を問い, 吟味すべきなのである。「楽天的お人好し」

§ 5

a. 「いかなるしかたで私が自分の理性を導こうとつとめてきたかを示す」ためにこの本を書いた。

b. この本が「ある人々にとっては有益であってしかもだれにも有害ではない」だろうことを信じる。(『エッセー』のモンテニユと、同じことを、言っている。)

§ 6 ~ § 13

a. 「私は幼少のころから文字の学問で育てられ、それによって、人生に有用なあらゆることの、明らかな確実な認識を得ることができるといういきかされていたので、それを学ぼうという非常に熱意をいただいていた。しかしながら、学業の課程を全部終えて、人並みに学者の仲間に入れられるやいなや、私の考えはまったく変わった。なぜなら私は多くの疑いと誤りとに悩まされ、知識を得ようとつとめながらかえっていよいよ自分の無知をあらわにしたというほかには、なんの益も得られなかったように思われたからである。」

b. 「文字の学問」・・・諸国語(ギリシア・ラテン語)、寓話、歴史、雄弁、詩、数学、道徳、神学、哲学、法学、医学、その他占星術や錬金術

c. 「これらの学問について・・・それらの正しい価値を知りそれらに欺かれぬようにするために、このようにすべてを吟味し終えたことは、無益ではなかった」(§ 7)。「欺かれる心配はないと思っていた」(§ 13)。自分の人生(学芸と実生活)が誰かによって誘導されたもの、そして自分も「これでいい」と思いこまされているだけのものなのではないのだろうか? 虚偽の人生を「歩まされて」いるのではないだろうか? 騙されているのではないだろうか? これまでの人生は自分の本当の人生ではなかったのではなかろうか? 私たちはデカルトとともに、これまでの自分の人生の吟味を始めていいのである。デカルトは<零からの出発>を決意したのである。では、自分とは何であり、それはどこにあるのだろうか?

§ 14 ~ § 15

a. 「こういうわけで私は、成年に達して自分の先生たちの手から解放されるやいなや、書物の学問をまったく捨てたのである。そして、私自身のうちに見いだされうる学問、あるいはまた世間という大きな書物のうちに見いだされうる学問のほかは、もはやいかなる学問も求めまいと決心」した。

b. 「私は、私の行動において明らかに見、確信をもってこの世の生を歩むために、真なるものを偽なるものから分かつすべ(方法)を学びたいという、極度の熱意をつねにもちつづけた。」

小括

デカルトは「神」が占めてきた場所に、「人間の良識・理性・精神」を置いたのである。自分の人生を導いている原理が本当に正しいのかどうか、理性によって吟味することなしに、自律的・自立的な人間たりえないだろう。他律的（人任せ）であってもいいという人は、とくに哲学する必要はない。自律はカントのキー・ワードであるが、デカルトの思想のキー・コンセプトも自律・自立である。理性のみが自分の足で立てるのである。

4. 第2部 方法的懐疑と思考の四つの規則

§ 1

「われわれはすべて一人前の人間であるまえに子供であったのであり、長い間われわれの自然的欲望と教師とに支配されねばならなかったが、これら二つのものはしばしば互いに反対しあい、それらのいずれも、いつでも最善のものをわれわれに選ばせたとはいえないのであるから、われわれの判断は、われわれが生まれたはじめからわれわれの理性の完全な使用ができてただ理性によってのみ導かれてきたとかりに考えてみた場合ほどには、純粹であり確実であることは、ほとんど不可能なのである。」

§ 2

「しかしながら、私がいままで自分の信念のうちに受け入れたすべての意見に関しては話は別であって、一度きっぱりと、それらをとり除いてしまおうと企てること、そしてそうしたうえでふたたび、ほかのいっそうよい意見をとり入れるなりあるいは前と同じ意見でも一度理性の規準によって正しくととのえたうえでとり入れるなりするのが、最上の方法なのである。そしてこの方法をとることによって私は、自分がただ古い土台の上に建てたにすぎなかった場合よりも、また幼いときに教え込まれた諸原理のみを、それが真理であるかどうか一度も吟味せずに、自分のよりどころとした場合よりも、はるかによく私の生活を導くことに成功するであろう、とかたく信じたのである。」

*仏和辞典に「doute methodique de Descartes（デカルトの方法的懐疑）」とあるくらい有名。懐疑のための懐疑ではなく、確実な真理を発見するための方法としての懐疑。すべてを疑う、徹底した懐疑的精神である。モンテーニュの強い影響を受けている、と言えよう。「これ本当かな？」「まちがっていないだろうか？」「だまされているんじゃないのだろうか？」目標は確実な真理。たんなる懐疑主義ではない。

§ 3

a. 「私の計画は、私自身の考えを改革しようとしてつとめ、まったく私だけのものである土地の上に家を建てようとする以上におよんだことはけっしてない。」

b. 「以前に自分の信念のうちに受け入れたあらゆる意見を捨てようという決心だけでも、だれでもが倣ってよい例ではない。」

§ 4

「・・・, そういう真理にとっては賛成者の数の多いことはなんら有効な証明ではないのだ, ということを知った. こういう次第で私は, 他をおいてこの人の意見をこそとるべきだと思われるような人を選ぶことができず, 自分で自分を導くということを, いわば, 強いられたのである。」

§ 5

「しかし私は, ただひとり闇の中を歩む者のようにゆっくりと行こう, すべてに細心の注意を払おう, と決心した. そしてそうすれば, たとえ少ししか進めなくとも, せめて倒れることだけはまぬがれるだろう, と考えた. のみならず私は, 理性に導かれずに前から私の信念の中へはいりこんでいた意見のどれをも, はじめから一挙に投げ捨てようとは思わなかった. それに先だち, まず十分な時間を費やして, 自分の企てる仕事の計画を立て, 自分の精神が達しうるあらゆる事物の認識にいたるための, 真の方法を求めようとしたのである。」

§ 6

a. 「こうしたことから私は, これら三つの学問 [論理学・解析・代数] の長所を兼ねながら, その欠陥をまぬがれているような, 何か他の方法を求めねばならぬと考えた。」

b. 「・・・, 私は, 論理学を構成するあの多数の規則の代わりに, たとえ一度でもそれからはずれまいという固い不動の決心をさえるならば, 次に述べる四つの規則で十分である, と信じた。」

§ 7

「第一は, 私が明証的に真であると認めたくてはいいかなるものも真として受け入れないこと. いいかえれば, 注意深く速断と偏見とを避けること. そして, 私がそれを疑ういかなる理由ももたないほど, 明晰にかつ判明に, 私の精神に現われるもの以外の何ものをも, 私の判断のうちにとり入れないこと。」(明証性の規則)

§ 8

「第二, 私が吟味する問題のおのおのを, できるかぎり多くの, しかもその問題を最もよく解くために必要なだけの数の, 小部分に分かつこと。」(分析の規則)

§ 9

「第三、私の思想を順序に従って導くこと。最も単純で最も認識しやすいものからはじめて、すこしずつ、いわば階段を踏んで、最も複雑なものの認識にまでのぼってゆき、かつ自然のままでは前後の順序をもたぬもの間にさえも順序を想定して進むこと。」(総合の規則)

§ 10

「最後には、何もかも見落とすことがなかったと確信しうるほどに、完全な枚挙と、全体にわたる通覧とを、あらゆる場合に行なうこと。」(枚挙の規則)

§ 11 (省略)

§ 12

「この方法が私を最も満足させた点は、この方法により、私はすべてにおいて私の理性を、完全にはなくとも、少なくとも私のできるかぎりにおいて最もよく、用いているのだと確信しえたことであった。」「理性を用いる」(§ 4)。「頭は、生きているうちに使いなさい」と言うことか。

*複雑なものの、アトムへの分解・分析。アトムから複雑なものへの総合。「壊しては組み立て、組み立てては壊す。」

**「子供たちが彼らの玩具でもってなすことができる最も理性的なことは、彼らが彼らの玩具をこわすことである。」(ヘーゲル『精神哲学(上)』岩波文庫、128頁)

***「クルミをくだくことはすでに分析のはじまりである」(エンゲルス『自然弁証法(2)』大月書店・国民文庫、60頁)。

****「分けること」は「分かること」に通じているのである。

5. 第三部

§ 1

「自分の住む家の建て直し」の際、「建築にかかっている間も不自由なく住める他の家を用意しなければならぬ」と同様、「理性が私にたいして判断において非決定(不決断)であれと命じる間でも、私の行動においては非決定(不決断)の状態にとどまるようなことをなくすため、そしてすでにそのときからやはりできるかぎり幸福に生きるために、私は暫定的にある道徳の規則を自分のために定めた」。

「道徳」とは「生き方」である。理論と行動(実践)を区別している。カントの用語で言えば、デカルトは理論理性の使用と実践理性の使用をはっきりと区別する。行動は猶予が許されないからである。デカルトは決断の行動を望み、優柔不断の態度を排する。デカルトは「幸福に生きる」ことを望む。

以下の「三つ四つの格率」からなるデカルトの道徳は、「仮の道徳・暫定的道徳(morale provisoire)」と呼ばれる。

§ 2

「第一の格率は、私の国の法律と習慣とに服従し、神の恩寵[恵み、いつくしみ]により幼時から教えこまれた宗教をしっかりともちつづけ、ほかのすべてのことでは、私が共に生きてゆかねばならぬ人々のうちの最も分別ある人々が、普通に実生活においてとっているところの、最も穏健な、極端からは遠い意見に従って、自分を導く、ということであった。」「法律」、「習慣(礼儀作法)」、「宗教(道徳)」、「分別ある人の穏健な意見」に従うことは、「道徳的に善い」。デカルトは、「30年戦争(1618 - 1648。ドイツを舞台として、新旧両教徒の宗教的争いに諸国が干渉し、30年の長期にわたって続いた最大の宗教戦争)」とともに生き、そして死んだ。戦争の名において、人は殺し合う。人間はなにを以てかすか知れない動物なのである。エラスムス(オランダ、1466 - 1536)は、「人間というものは、生物のなかでいちばん悲惨だが、その理由は、どの生物もその本性の分限に甘んじているのに、人間だけがその分限を超えようと努力しているからだ。」(『痴愚神礼讃』岩波文庫)、と言っている。デカルトは、人間として「間違ったこと(悪・不正)」をしたくない(「本当の道からそれることが少なくすむだろう」と望み、そのためにはどうすべきか、と考えたのである。デカルトの立場は<穏健(中庸)は善><極端(過激)は悪>というものである。釈尊や孔子やアリストテレスも、中庸の立場に立った。

* 「それら分別ある人々の意見が、真実にはどのようなものであるかを知るためには、かれらが口にするところよりはむしろかれらが実際に行なうところに注意すべきであると思われた。」ヘーゲルも、同じことを言っている。「人間は、かれの外的な見かけから認識されるよりも、むしろかれのもろもろの行為から認識されることがずっと多いのである。」(ヘーゲル『精神哲学(上)』岩波文庫、322頁)孔子もソクラテスも、そう考えた。

** 「人があることを信じるときの思考の働きは、自分があることを信じるときの思考の働きとは、ちがうものであって、前者が後者をともなわないことはしばしばあるのだ。」「対象意識」と「自己意識」の問題(酔っ払いの意識不明[前後不覚]、または点線のような自己意識)。「自己反省する意識(自己意識)」の意義。

*** 「約束(法律・契約・誓約・ルール)」についての見識。判断力をたえず磨くのが、約束の時点で「善い」と思ったものが、履行の時点で「善くないもの(悪いもの)」と判断される可能性がある。しかし、約束した以上、もはや善いとは思わないのに、善いと思って履行せざるをえない。それは「自分の考えを変える自由を多少とも失うこと」であり、さらに言えば「私は良識[善悪を判断する理性]にたいして大きな過失をおかすことになる」、とデカルトは言う。約束を破ることは悪い。約束を破らないための最上の方法は、約束しないこと、なのである。

§ 3

「私の第二の格率は、私の行動において、できるかぎりしっかりした、またきっぱりした態度をとることであり、いかに疑わしい意見にでも、いったんそれをとると決心した場合は、それがきわめて確実なものである場合と同様に、変わらぬ態度で、それに従いつづけること、であった。」やると決めたら、やる。

ここに、有名な「森に迷い込んだ旅人たち」の譬え話がでてくる。デカルトの精神は冴えている。「実生活の行動はしばしば猶予をゆるさぬものであるから、より真なる意見を見分けることができない場合に、より蓋然的 (probable) なものをわれわれがとるべきであるという、このこと自身は、きわめて確実な真理なのである。」デカルトのモチーフは、「確信をもってこの世の生を歩む」ことである。デカルトは、この「確信」が何であるか、またこの「確信」をもつにはどうすればいいのか、を探究した。かれは研究に専念したかった。しかし、私は「私が共に生きてゆかねばならない人々」とのコミュニケーション (世の中) において生きてゆくほかないのである。

* 「越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか寛容で、束の間を命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職ができて、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするがゆえに尊い」(漱石『草枕』)。

**湯川秀樹も、「この世は人間にとって住み難い所」と断じ、「こういう住み難い世界に生れ合せた人間なればこそ、皆ができるだけ仲好くして、少なくとも人間同士の争いからくる不幸を最小限度にしたいと思う」(『徹底ということ』、『湯川秀樹著作集6』岩波書店、22頁、20頁)。

***人間の本性に根ざす「悪徳 (痴愚)」のすべてを暴き、批判することなしに、みずから「人間であること」を認めることのできなかつた、かのエラスムスも、「およそいかなる平和も、たとえそれがどんなに正しくないものであろうとも、もっとも正しいとされる戦争よりは良いものです」(『平和の訴え』岩波文庫)、と言う。「戦争はじつに凶悪なものですから、野獣どもにこそふさわしい、人間にはふさわしくないものです。それはじつに気違いめいたことですから」(『痴愚神礼讃』岩波文庫)。痴愚女神は、ありとあらゆる人間の痴愚を礼賛するのであるが、不思議なことに、最大の痴愚とも見做し得る「戦争」だけは、批判するのである。痴愚の女神から見ても、「戦争」は、痴愚を超えた愚拳、と思わざるを得なかつたのもあろう。

金を借りるべきかどうか？金を貸すべきかどうか？授業にでるか寝ているか、遊ぶか？いかなる職業を選ぶべきか？誰と恋愛すべきか、結婚すべきか？子供は何人にするか？どのように賤、教育するべきか？これらは、ほとんどprobableであるから、数学のような絶対確実さなどというものは、最初からない、と言うよりも、ありえないのである。「このこと自身はきわめて確実な真理なのである。」つまり、不確実だということは絶対確実なのである。人生、やってみないと、いまいかわるいかわからないのである。だからこそ、選択の知恵と勇気、選択した道を「つねに同じ方向に、できるかぎりまっすぐに歩む」堅忍不拔の意志力が必要なのである。もし万一失敗したとしても、「禍いを転じて福となす」「人間万事塞翁が馬」なのである。

なにを選択し行動してもいい、とデカルトは言うのではない。「第二の格率」は「第一の格率」を前提としている。(人間は選択する動物である、他人を害しないすべてをなし得る、選択できる

ことを自由と言う [1789年『フランス人権宣言』第4条]. サルトル [Sartre, フランス, 1905~1980] は、「人間は自由の刑に処せられている (condamné à être libre)」, と言った. 選ぶことができる, というよりも, 選ばざるをえない, ということ. この人間の自由を, 「人間の悲しい性」「人間の宿命」と捉える人もいる [岩崎武雄氏『哲学のすすめ』, 講談社現代新書.] すなわち, 「第一の格率」によって, 本質的に不確実な, 行動(行為・行ない)の選択の幅(範囲)は, 「道徳的に善なるもの(森)」の内側に設定されている. 悪徳, 痴愚の類は最初から退けられている. 人間の行動は, 選択の行動.

§ 4

「私の第三の格率は, つねに運命 [環境] に打ち克つよりもむしろ自己に打ち克つこと (克己) に努め, 世界の秩序 [社会経済政治宗教の制度] を変えようと努めるよりはむしろ自分の欲望を変えようと努めること, そして一般的に言って, われわれが完全に支配できる [意のままにしよう] ものはわれわれの思想 [pensees・頭の中で考えるもの] しかなく, われわれの外なるものについては, 最善の努力を尽くしてなおなしとげえぬ事柄はすべて, われわれにとっては絶対的に不可能なのだと信じる [確固として信じる・確信] 習慣をつける [自分を慣らせる・諦めさせる] こと, であった。」ストア哲学者たちは「かれらの支配できるものはみずからの思想しかない, ということを完全に確信する」に至った. デカルトも, 「できるだけ幸福に生きる」ことを望んだ. そして誰でも幸福に生きること (comfortable life・快適な生活) を願う. 幸福の尺度はひとさまさまであるが, である.

末期癌患者は誰も救えない. そのとき, 人は運命 (寿命) だと諦観する. デカルトは「自分の思想」以外のすべてを, 「われわれの外にあるもの」, つまり自分の力・努力ではどうすることもできないもの, と切り捨てる (割り切る). もう, 考えても無駄, と言うわけである. 「末期癌のようなもの」は, いっぱいあるであろう. 嫌な奴だと思っても, その人の性格を, 自分の好みにあわせて変えることはできない. 「どうすることもできないもの」なのである. 「人は人, 自分は自分」.

醜い顔の人が, その醜さを親のせいにする. 悪い頭の人が, その悪さを親のせいにしたりする. たしかに, 親のせいもある. しかし, 顔の醜さも, 頭の悪さも, 親子の責任は「半分半分」なのである. そのように理解できたとき, 人は運命を責めたり嘆いたりせず, みずからの主体的責任 (実存) を引き受けて, みずからの主体的責任 (実存) において, 生きてゆくであろう. 運命を責めるとき, 運命に負けると同時に自分にも負けるのである. きわめて難しい問題ではあるが, この程度の理解はしておく必要がある.

§ 6 (略)

§ 7

「自分の知らぬことを知らぬと告白した」. 孔子とソクラテスを, 想起せよ. 立派な人はみな同じことを言う. 「隠れて住む」とは? 「1. ルネ・デカルト」を見よ. そこに「孤独な隠れた生活」とある. 「賢者は隠れて生きる」. 「隠れて生きよ」とは, エピクロスの考えであった (『エピクロス』岩波文庫). 孔子の時代, 賢者は狂人を装って生きることもあったらしい.

6. 第4部

§ 1 「我思う、故に我あり」

「私は気づいた、私がこのように、すべては偽である、と考えているあいだも、そう考えている私は、必然的に何ものかであればならぬ、と。そして『我思う、故に我あり (Cogito, ergo sum)』 Je pense, donc je suis. というこの真理は、懐疑論者のどのような法外な想定によっても揺り動かさぬほど、堅固な確実なものであることを、私は認めたから、私はこの真理を、私の求めていた哲学の第一原理として、もはや安心して受け入れることができる、と判断した。」

§ 2 精神と物体の二元論 (心身二元論)

「次いで、<私>が何であるかを注意深く吟味し、次の(二つの)ことを認めた。

[1] すなわち、<私>は、<私>が身体をもたず、世界というものも存在せず、<私>のいる場所というものもない、と仮想することはできる (pensable)、がしかし、だからといって、<私は存在しない>とは仮想することはできず、それどころか反対に、<私(我)>が他のものの真理性を疑おうと<考える(思う)>こと自体から、きわめて明証的に、きわめて確実に、<私は存在する(我あり)>ということが帰結する、ということ・・・

[2] さて、これらのことから、<私>は次のことを知った。すなわち、<私>は一つの実体であって、その本質あるいは本性はただ、<考える>ということ以外の何ものでもなく、<存在する>ためになんらの場所をも要せず、いかなる物質的なものにも依存しない、ということ。したがって、この<私>というもの、すなわち、<私>をして<私>たらしめるところの<精神(esprit)>は、<物体(corps)>から完全に分離したものであり、さらにまた、<精神>は<物体>よりも認識しやすいものであり、たとえ<物体>が存在しないとしても、<精神>は、それがあるところのものであることをやめないであろう、ということ。」

*二元論・・・精神の問題は精神によってしか、また肉体の問題は肉体によってしか解けない、という考え

**「実体 (substantia)」とは、「それ自身によって存在するもの、その存在のために他物を必要としないもの」(デカルト)である。デカルトにおいては、神は無限実体、精神と物体は有限実体である。なお、デカルト哲学を批判的に継承したスピノザ (Spinoza, オランダ, 1632~1677) の主著『エチカ (倫理学)』によれば、「実体とは、それ自身において存在し、それ自身によって考えられるものことである。言い換えれば、その概念を形成するために他のものの概念を必要としないものことである (I understand SUBSTANCE (substantia) to be that which is in itself and conceived through itself: I mean that, the conception of which does not depend on the conception of another thing from which it must be formed.)」(「第一部」「定義3」)スピノザにおいては、実体は神のみで、精神(思惟)と物体(延長)は神の「属性 (attributum)」とされ、「神即自然 (God or nature)」(『エチカ』「第四部」の「序文」および「定理四の証明」)の一元論・汎神論の立場が説かれる。

***汎神論・・・一切は神であり，神と世界は一体のものとする説．スピノザの説く汎神論は，神に力点を置き，世界は，唯一の絶対的な実在（唯一実体）としての神の有限な様態（modus）の総和にすぎないと見て，世界を神に没入させる．世界に神を没入させる種類の汎神論などもある．

****様態（modus）・・・一般には，事物のあり方をいう．スピノザは有限な事物を，無限な不変の実体＝神の変化してゆく，かりそめの形態と考え，それを＜様態＞と呼んだ．ちょうど水が実質を変えずに，その容器次第で形態を変えるようなものである．これが「様態は実体の変様である」（『エチカ』「第一部」「定義5」）との定義の意味である．したがって，様態は実体のうちにあり，それなしには考えられないものである．そして実体の本質をなすものが「属性」であるから（「属性とは，知性が実体にかんしてその本質を構成するものとして認識するものことである」[『エチカ』「第一部」「定義4」]），様態は実体の属性の変様（modification）である．様態は実体の非本質的な状態であり，その点で「偶有性（accidens）」とちがわないが，それを実体の変化する形態という観点からとらえたものである．

*****偶有性（accidens）・・・偶有的属性とも言う．実体のもつ性質であるが，それが加わっても，変化しても，消失しても，実体そのものが破壊されないようなもの．物の非本質的な性質のこと．

§ 3

「次に私は，一般に一つの命題が真で確実であるために必要な条件を考察した．というのは，真で確実だと私の知る一つの命題をいま見出したのであるから，その確実性が何において成立するかをも，やはり知ることができるはずだと考えたのである．そして，「我思う，故に我あり」という命題において，私が真理を言明していることを，私に確信させる[古代・中世と異なる近代の独立独歩の自我・人間の誕生を告げた一句]ものは，考えるためには存在せねばならぬということを引きわめて明晰に（clair, clear）私が見るということより以外に，まったく何も無い，ということをも認めたから，私は，「われわれが引きわめて明晰かつ判明に（clair et distinct）理解するところのものはすべて真である」ということを，一般的規則として認めてよいと考えた．」

* 『仏和辞典』を見ると，「cogito [コジト] : コギト，哲学の基礎（出発点） デカルトのcogito ergo sum = je pense, donc je suisから」とある．デカルトの樹立したコギトは，わたしたちの生きている近代世界の基礎・土台である．コギトは，ルソー（Jean - Jacques Rousseau, 1712 - 1778, スイスに生まれ，フランスで活躍）を通して，1776年の『ヴァジニア権利章典』『アメリカ独立宣言』，続いて1789年『人権宣言（Declaration des Droits de l'homme）』を，そしてさらに1946年の『日本国憲法』を生み出した原理なのである．

**ルソーの代表作は『人間不平等起源論』『社会契約論』『エミール』『告白』（すべて岩波文庫で読める）である．一度は読んでおくほうがいい．本の読み方は，がむしゃらな多読乱読と，はりつめた熟読精読，両方とも必要である．

*** 「命題 (proposition, Satz) : 判断を言語で表わしたもの . S is P.」, 「概念・判断・推理」.

以下, § 4 ~ § 8, 第 5 部全部, 第 6 部全部 : 省略 .

(追記)

この「デカルトの生き方」は, 1997年頃の講義の際に, 学生のために, 書いて配布したものである . 論考として公表するのには, それなりの訳があるが, それを説明するには及ぶまい . 私は「人と人との間」を, 人間の基本的条件として重視するが, 「コギト」をも重視している . このことが伝われば, この論考の役目は果たせたことになる .

(2002・3)